

# 真福寺貝塚における資源利用

## 一 はじめに

縄文時代は四季を通じて様々な自然の恵みを利用し、それを有効活用して生活を営んできた。自然の恵みを利用するにあたり、縄文人がそれを資源と認識しなければ、それはただのモノであり、ヒトが価値を見出すことで初めてモノは資源となる。

現在のわれわれの多くが秋に実るドングリに対して季節の移ろいを感じさせる木の實として認識はするものの、食料資源としての価値をあまり見出さないように、また金属器の普及した今日において、黒曜石を利器の素材としてほとんど利用しないように、資源は人々の生活習慣や価値観とともに変化する。

本論では、現在史跡整備のため発掘調査を行っている真福寺貝塚の調査資料や過去の出土資料を基に、遺跡内での資源利用の実態について概観する。

## 二 資源利用からみた真福寺貝塚の特徴

縄文時代の資源利用について、わかりやすく可視化したものに縄文カレンダーがある(図1・小林一九九六)。この縄文カレンダーにより縄文時代の四季折々の資源利用の実態が分かりやすく解説されており、概説書や博物館の展示パネル等にも多く掲載されている。ただし、このカレンダーの内容は、縄文時代

の総体を表現したものであり、縄文時代の各時期、地域によって、その内容は異なることは言うまでもない。特に海に面した沿岸部や海から遠く離れた山間部等の立地環境により、利用可能な資源は少なからず制約を受けることになる。

さいたま市教育委員会 吉岡 卓真



図1 縄文カレンダー (小林 1996)

なお、一般的に行われている台地上の発掘調査では、火山灰に由来する酸性土壌という環境のもと、遺跡内で確認できる資料は、竪穴住居等の遺構や、土器や石器といった無機質な遺物がほとんどであり、まれに腐食を免れた炭化資料により、有機質の資料を少量確認できる程度である。そのため、縄文カレンダーに掲載された食料資源を一つの遺跡で全て確認することは、よほどの好条件でないとは難しい。

そうした中、真福寺貝塚では貝塚が存在することで貝殻から染み出たアルカリ成分により酸性土壌が中和され、貝や骨といった有機質の資料が豊富に残存する。さらに遺跡の西側に広がる低地内には未分解の植物遺体が厚く堆積する泥炭層が発達することにより、木の実や木材といった、貝塚でさえ確認することが難しい植物遺体等が未炭化の状態で出土する。

このように腐食・消失を免れるための様々な条件が揃う真福寺貝塚は、遺跡内の資料だけで、当時の食料資源の多くを復元可能なほど、他の遺跡よりも情報量に恵まれている。

本論では他の遺跡に比べて多彩な資源利用の実態が復元可能な真福寺貝塚の中で、特に水産資源、陸産資源、植物資源、石材資源の四点に絞り考察を行っていくこととする。

### 三 真福寺貝塚と市内の後晩期遺跡

国史跡真福寺貝塚は、県東部に位置する大宮台地の中央東側に立地する縄文時代後期前葉から晩期中葉まで継続した、貝塚

を伴う集落遺跡である。なお、大宮台地は北西から南東方向に流れる複数の河川が台地を侵食、分断し、いくつかの支台を形成する。その中で遺跡は綾瀬川と元荒川に画された岩槻支台上にあり、綾瀬川から北東方向に約一・三km入り込む支谷の東側、最奥部に所在する(図2)。遺跡の標高は約十三m、西側の泥炭層が堆積する谷部との比高差は約三mを測る。

市内には、真福寺貝塚と同時期の遺跡が現在十か所ほど確認されており、これらの遺跡は継続期間や遺跡規模、形態が非常

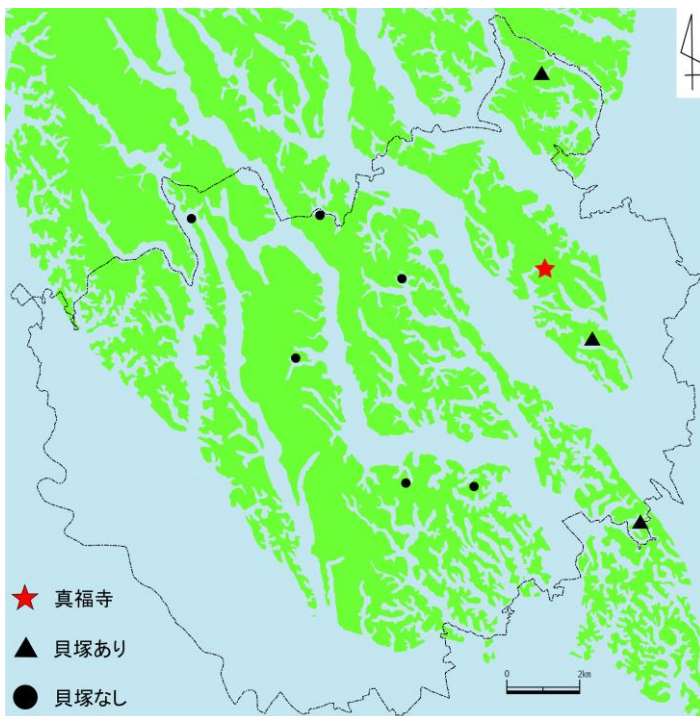


図2 真福寺貝塚の位置とさいたま市内の後晩期遺跡

によく似ている。特に当該期の遺跡に特徴的な所謂「環状盛土遺構」と呼ばれる高まり状の起伏を、多くの遺跡で確認することができる。そしてこれらの遺跡の中で、貝塚を伴う遺跡は主に綾瀬川以東の遺跡に多く、市内の西側に所在する遺跡からは貝塚が発見されておらず、貝塚の分布に偏りが見られる。

ちなみに市域の西側、現在の荒川流域には遺跡の空白地帯が存在するように見えるが、後晩期の遺構遺物を伴う遺跡は存在する。ただし、その規模は非常に小さく、遺跡の形態も環状ではなく小規模なまとまりを特徴とする。さらに当該期の多くの集落遺跡に特徴的に見られる所謂「盛土」状の累積した土層堆積の発達が乏しいなど、集落形態や構造等に明らかな差異が見られる(吉岡二〇一八a)。

話を貝塚に戻すならば、市内の貝塚を伴う遺跡の中でも真福寺貝塚は突出した規模を有する遺跡であり、これまでに地下レーダー探査等により地点貝塚が数十か所確認されている(岩槻市二〇〇〇)。その一方で他の遺跡は直径数m規模の貝塚が数か所確認されるのみである。

ここで真福寺貝塚の海産資源の利用を考える上で、当時の海岸線を確認しておくことは重要である。縄文時代前期にピークを迎える縄文海進の頃、当時の海岸線は県北を越え、栃木県南端部まで到達する。そして縄文前期の終わり頃になると一転、海退に転じ、海域は縮小していく。そのため真福寺貝塚が形成されていた当時の海岸線は、現在の川口市や草加市以南に後退

していたことが指摘されている(遠藤二〇一七)。したがって当時の海岸線は、真福寺貝塚から直線距離にして、約十五km以上は遠のいていたことになる。

さらに詳細に当時の海岸線を想定するならば、東京都北区西ヶ原貝塚の貝種組成は重要である。西ヶ原貝塚では、後期前葉までは海の貝であるハマグリ等を主体とする鹹水産貝塚であったものが、後期後葉以降、より塩分濃度の低い水域に生息する、汽水産のヤマトシジミ主体の貝塚に変化する(植月二〇一六)。そのため、縄文時代後期という時間幅の中でも海退はさらに進行していたことが想定される。その場合の真福寺貝塚から当時の海岸線までの距離は、直線距離にして二十km以上にもなる。

したがって、なぜ本遺跡に貝塚が存在するのかということの説明する場合、当時海が近くにあったから貝塚ができたという説明を真福寺貝塚に当てはめることは妥当ではない。しかも真福寺貝塚の所在する場所は、市内の中で最も海に近い南端ではなく、むしろ中ほどに位置している。つまり貝塚形成の要因としては、地理的な優位性が働いていたというよりも、周囲の遺跡よりも貝類利用に対して積極的に資源化を図った結果が顕現したものと解釈すべきであろう。

#### 四 真福寺貝塚の概要

遺跡は綾瀬川から北へ入り込む谷が途中で北東方向へ向きを変えた最奥部に所在する。標高約一三mを測る東側の台地上に

は、高まり状の起伏が西側の谷に向かって逆C字状に展開しており、所謂「環状盛土遺構」を伴う(図3)。そしてこの高まり内からは、貝塚や住居跡が確認されていることから、この高まりは主に居住域として利用されていたことが想定される。一方、西側の谷部からは、縄文晩期中葉を主体とする多量の土器とともに、クリやクルミ、トチノキといった当時の主食であった堅果類や籃胎漆器をはじめとする各種木製品等の有機質の遺物が豊富に出土しており、集落を支えた水辺の活動域が展開していたものと理解される。

なお本遺跡で実施された泥炭層地点の調査は非常に古く、大正十五年(一九二六)までさかのぼる。この調査は西郷隆盛の従弟にあたる大山巖陸軍元帥の次男、大山柏によって実施された調査であり、それはわが国初の学術的な泥炭層調査として学史に刻まれている(阿部二〇〇四)。その後、戦前、戦後を通じて大学、研究機関等により相次いで実施された調査で出土した土器の一部は、縄文時代後晩期の土器型式である安行式土器の細別に深くかわり、土器の型式学的研究に関わる標識資料を提供した遺跡としても著名である。

## 五 真福寺貝塚における資源利用

### (一) 水産資源

真福寺貝塚の貝種構成を示したのが表1である。上段から下段に向かって、塩分濃度の高い水域に生息する貝種を表示し

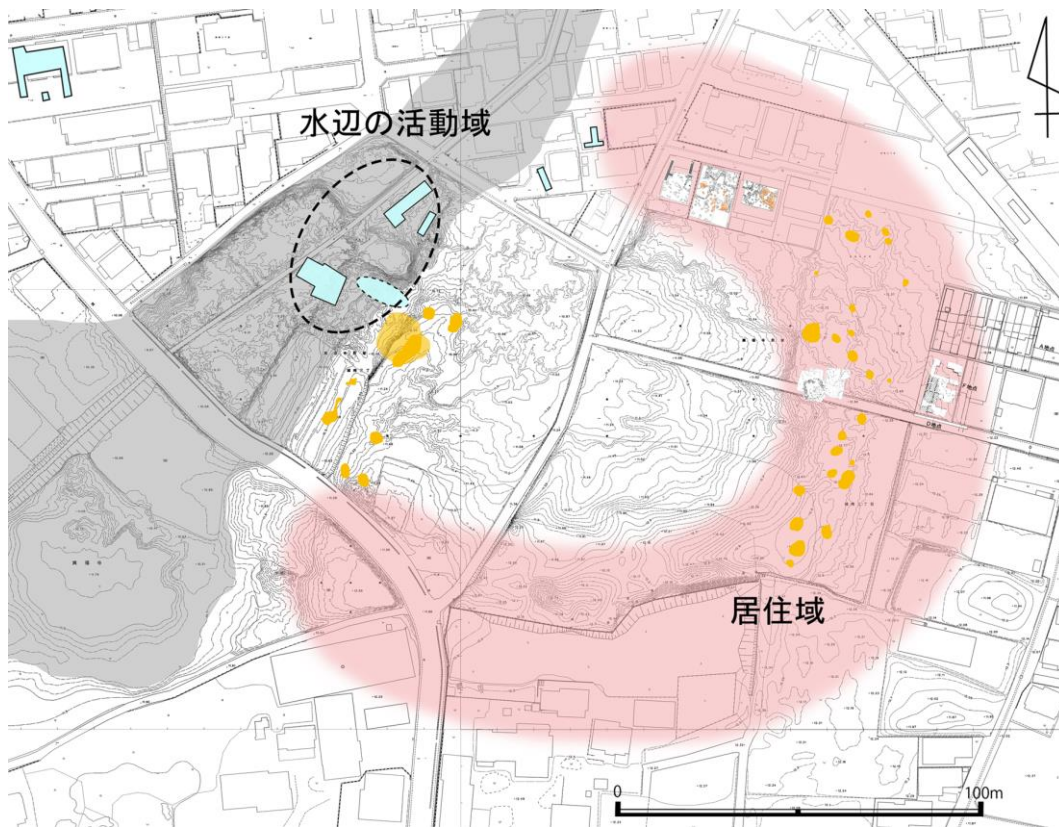


図3 真福寺貝塚の立地

た。真福寺貝塚周辺での貝類の採取環境を知る手がかりとして、遺跡内の谷部で実施されたボーリング調査がある（岩槻市二〇〇〇）。このボーリング調査によって得られた珪藻分析の結果によると、集落開始よりも前に遺跡周辺はすでに淡水環境であつたことが指摘されている。したがって、本来ならば本遺跡の貝種は淡水種が卓越することが想定される。しかしながら発掘により出土した貝の中で主体となる貝種は、汽水産のヤマトシジミであり、未だ正確な貝種組成の検討は行われていないが、その比率は七割以上を占めることは確実である。そして残り三割をハマグリやカキといった鹹水種やオオタ

淡水	オオタニシ、イシガイ、カワニナ
汽水	◎ヤマトシジミ
鹹水 (砂泥質)	○マガキ、ハイガイ、オキシジミ、オオノガイ
	アカニシ、アラムシロ、フトヘナタリ
鹹水 (砂質)	○ハマグリ、シオフキ、カガミガイ、サルボウ、オキアサリ
	イボキサゴ、ツメタガイ
	ベンケイガイ、ヤカドツノガイ、イモガイ
鹹水 (岩礁)	アワビ、オオツタノハ、イタボガキ ◎非常に多い、○多い

表1 真福寺貝塚出土の貝種

たことが指摘されている。したがって、本来ならば本遺跡の貝種は淡水種が卓越することが想定される。しかしながら発掘により出土した貝の中で主体となる貝種は、汽水産のヤマトシジミであり、未だ正確な貝種組成の検討は行われていないが、その比率は七割以上を占めることは確実である。そして残り三割をハマグリやカキといった鹹水種やオオタ

ニシ、イシガイといった淡水種が占有する構成となる。中でも淡水種に関しては、鹹水種よりもさらに出現率は低い印象がある。したがって本遺跡では、近場で採取可能な淡水種よりも、より遠方の鹹水種を嗜好していたことになる。なおここで表示したものの多くが、食料資源ではあるが、下段に示してある薄文字の貝種は、主に貝輪や垂飾品等、食用以外の目的で利用されたものになる。ちなみに現在は高級食材である岩礁性のアワビも真福寺貝塚では鏝として加工された状態で出土している（青木ほか二〇一六）。このように貝類に関しては食料資源のみならず、装飾や利器として利用されたものも持ち込まれている。なお、ツノガイは大きさ十cmほどの象牙のような形状をしており、それをビーズのように輪切りにした装身具が縄文早期から見られる。その生息場所は種類にもよるが一般的に水深十m以上、時に一〇〇m近い水域にあり、生きたものを採取することは難しい（児山一九八五）。したがって一般的な採取方法としては海岸に打ち上げられたものを採取したと考えることが妥当である。

しかしながら、縄文前期の事例になるが品川区居木橋遺跡で発見されたツノガイについて、その年代を測定した所、約四万年前という年代が示された（石川他二〇一一）。そのため、海辺での採取ではなく、露頭から化石化したものを採取した可能性が指摘されている。その年代が氷期に相当しており、その採取場所に関しては検討を要するが、真福寺貝塚のツノガイに関し

ても、打ち上げられた貝を利用したものなのか、はたまた縄文人による露頭からの発掘品なのか、入手方法の検討が必要な遺物の一つに挙げられる。

次に魚類や海生哺乳類等について表2に示す。魚類は淡水から鹹水まで、貝類と同じように幅広い水域に生息する資料が確認されている。現状では貝類同様、水域毎の魚種の構成比率は不明である。したがって貝類と同じように汽水域の魚種が卓越するのか、それとも遺跡周辺で採取可能な淡水種が卓越するのか今後検討を行う予定である。ちなみに真福寺貝塚と同時期に存続していた東京湾東岸にある千葉市誉田高田貝塚では、当時の海岸線から約十二kmも離れているにも関わらず、鹹水種を

主体とした巨大な貝塚が作られるが、魚類は遺跡周辺で捕獲されたと思われる淡水種が卓越するなど、貝類と魚類で採取環境が異なる事例が報告されている(樋泉・西野一九九九)。同様の傾向は、東京湾西部の西ヶ原貝塚でも確認されており、奥東京湾の湾奥に位置する真福寺貝塚の魚類構成は当時の水産資源利用の様相を考察するうえで重要である。

また海生哺乳類等としてクジラ

魚類 (淡水)	コイ科、フナ、ウナギ
魚類 (汽水～内湾)	クロダイ、ボラ、スズキ
魚類 (鹹水)	マダイ、トビエイ
海棲哺乳類等	クジラ、アオウミガメ

表2 真福寺貝塚出土の魚種

やアオウミガメといった大型動物の出土が報告されており、入手方法は不明であるが多様な水産資源の利用が行われていたことは間違いない。

### (二) 陸産資源

遺跡から確認された陸産動物については表3のとおりである。基本的にはシカ、イノシシ等の大型動物が主体で、タヌキ等の小動物も出土する(酒詰一九八四)。当該期の東京湾沿岸部の貝塚遺跡と比較しても特に目立つた変化は見られない(樋泉・西野一九九九、植月二〇一六)。

なお、遺跡から出土する獣骨のほとんどは打ち割られたものが主体であり、内部にある骨髓等を食糧資源として利用した結果であると認識する。その中でシカの中手、中足骨は、長く直線的な形状のため、縄文時代を通じて骨角器製作のための素材として利用されることが多い部位である。そのため霞ヶ浦周辺地域や、千葉県の外房にある銚子市余山貝塚では漁労具であるヤスや加工途中の素材が多く確認されている(図4・阿部二〇一六)。

しかしながら真福寺貝塚ではこれらの部位

哺乳類	◎シカ、◎イノシシ、タヌキ、ノウサギ、アナグマ、テン
鳥類	ガン、キジ、コウノトリ、ワシ ◎非常に多い

表4 真福寺貝塚出土の木製品類

を重視した痕跡はそれほど見られず、現在調

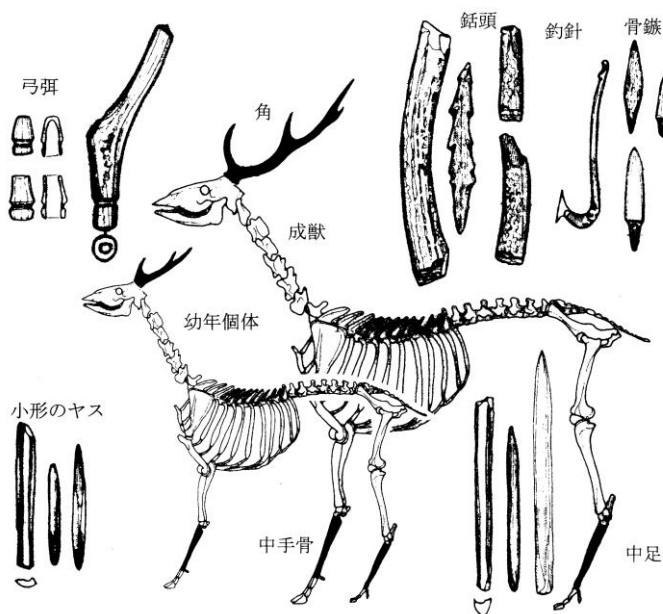


図4 シカの骨格と利用部位 (阿部 2016)

工途中の素材も乏しい。したがって、真福寺貝塚では漁労目的の骨角器製作を積極的には行っていないことが想定される。その場合、マダイ等の比較的深い海に生息し、捕獲にあたり釣り針等の骨角器の存在が必要不可欠な魚種をどのような方法で入手したのか興味深い。

査中の貝塚からは他の骨と同様、打ち割られたものを多く確認している。そしてそれを裏付けるように骨角器そのものの検出も少なく、製品や加

(三) 植物資源

これまでに発掘された木製遺物は表4に示したとおりである。藍胎漆器等の容器類や朱塗木製耳飾り、漆塗堅櫛といった装身具、また狩猟具である丸木弓にいたるまで、幅広い用途の道具類が確認されている。また注目すべき遺物として木器未製品の存在があげられよう。こうした未製品の存在は、遺跡内での木材加工が実施された証拠として重要である。

次に自然遺物について植物遺体・花粉等が確認されたものを表5に示す。

堅果類に関してはクリ、オニグルミ、トチノキといった植物遺体そのものに加え、それらの花粉も確認されている。特にクリの花粉は近年行われたクリ畑でのクリ花粉の散布状況を調査した結果によると、樹木花粉全体に占めるクリ花粉の出現率は、クリ林の中では三十%以上、クリ林から二十m離れると五%以下になり、二〇〇mで一%以下にまで低下することである(吉川二〇一一)。このようにクリ花粉はあまり飛散しないことが確認されており、自然の植生ではごくまれな出現率となる。

真福寺貝塚では、集落形成の開始と連動するように、クリ花

木製品 (漆塗り)	漆器片、藍胎漆器、朱塗木製耳飾り、櫛
木製品	ザル?、籠の破片、木器未製品、丸木弓
加工木	杭、焼けた木片

表4 真福寺貝塚出土の木製品類

粉が増えていることから、居住開始とともに遺跡周辺の森林資

堅果類	クリ、オニグルミ、トチ、コナラ、ミズナラ
植 物	アズキ、ヒョウタン、ゴマ、ヤマゴボウ
樹 木	イヌガヤ、エゴノキ、エノキ、カヤ、ツバキ
樹 木 (花粉)	クリ属、クルミ属、トチノキ属、コナラ亜属、アカガシ亜属
	ウルシ、カヤ、シイノキ属、カエデ属、ブドウ属、ニワトコ属近似種
低地性樹木 (花粉)	トネリコ属、ハンノキ属、ヤナギ属

表 5 真福寺貝塚出土の植物遺体と花粉

源に手を加え、有用植物が繁茂できるような環境整備を積極的に行っていたことが想定される。また近年、史跡内の谷部下流側で実施したボーリング調査に付随した、最新の花粉分析では、ウルシの花粉も確認されており、(吉川 未公表、能城二〇一八)、遺跡から出土した多くの漆塗り製品に関しても、遺跡内で漆工を行っていた蓋然性がより高まっている。当然、ウルシ液を採取するために恒常的な森林の維持管理も行っていたものと予測される。

に多様な石材が出土する。県外からの入手品としては黒曜石があり、貴石としてはヒスイの存在があげられる。ヒスイは、縄文時代の北海道を含む東日本を中心に幅広く出土が確認されているが、そのほとんどは新潟県西部の糸魚川周辺でのみ産出されることが指摘されており、当遺跡のヒスイも日本海側から運び込まれたものと想定される。

また石鏃素材として多く利用された黒曜石は関東地方では主に高原山(栃木県)、信州(長野県)、箱根(神奈川県)、神津島(東京都)が縄文時代を通じて利用されてきた産地である。いずれも当遺跡から一〇〇km以上も離れた産地ばかりで、神津島は一八〇km以上離れた太平洋洋上に位置する。

千葉県では、縄文早期から後期までの間、神津島産の黒曜石が重用されるが、信州産をはじめとするその他の地域の黒曜石を必ず少量伴う事例が散見される(堀越二〇一〇)。縄文時代を通じて産地を一ヶ所に限定せず、複数の入手経路を確保する素材獲得の戦略性が垣間見える。また同一地域内の遺跡でも縄文中期と後期で主体となる産地が異なる事例も見られる。

したがって真福寺貝塚のような長期間継続した遺跡でも、常に入手先は一定だったのか、縄文後期と晩期で入手先を変更した可能性はないのか注視していく必要がある。

同じく、石鏃製作に多用された石材としては、入間川流域で採取可能なチャートがある。遺跡での出土状態は、未加工の原石、加工途中で生じる剥片や破片、完成間近の未製品、そして

(四) 石材資源  
石材そのものが乏しい大宮台地にあっても、当遺跡からは実



完成品に至るまで、一通りの石器製作工程を示す状態で、一定量確認することができる。このことから石材入手にあたり、原石の状態で遺跡内に持ち込まれ、石器製作が行われていたことは確実である。興味深いのは、県外産の黒曜石であっても、県内産の石材と同様、原石の状態で持ち込まれ消費されており、石材産地の距離とは関係なく、一貫した石材の入手と消費が行われていたようである。

また、石棒・石剣といった祭祀用具に多く利用される緑泥片岩も当遺跡では原石・剥片・製品の各状態のものが多数出土している。県内での産地は主に長瀬周辺に求められる。荒川が南流する当市域では当然、河川運搬作用により素材が流れ着く可能性はあるものの、それらを石器素材として利用した可能性は極めて低いといえる。なぜならば緑泥片岩の硬度は二く三と非常に柔らかいため、十cmを超える製品を基本とする石棒類の素材を、遺跡周辺で確保することは困難である。それにもかかわらず、真福寺貝塚では十cm、時には二十cmを超える大型の剥片も多数出土している。ちなみに荒川中流域で実施された河原での採集調査によると、熊谷市内の河床面を構成する礫は、すでに五cm前後まで縮小しているとの報告も見られる（栗島二〇一二）。したがって、真福寺貝塚で出土するこれらの素材の多くは、より上流域から持ち込まれたものと判断される。

## 六 まとめにかえて

真福寺貝塚は上述のとおり、これまでの調査により有機質、無機質の多彩な資料が出土しており、多方面にわたる資源利用を検討することが可能な、極めて貴重な遺跡である。しかも未だに多くの遺構・遺物が史跡として保存されている。

現在実施中の史跡整備に関わる発掘調査でも、日々多くの遺物が出土しており、今後の分析によりさらなる資源利用の実態が明らかになることは間違いない。それに加え当遺跡では、学史に記憶される調査も含め、実に多くの調査が行われており、豊富な出土遺物や調査資料が各研究機関等に保管されている。

今後は、これら既存資料の再調査・分析等も同時並行で行うことにより、真福寺貝塚の資源利用の実態についてさらに明らかにしていくことが課題である。そしてこの課題解決こそが、縄文時代後晩期を代表する国史跡としての当遺跡の役割であると認識する。

### 【引用・参考文献】

青木文彦他二〇一六『史跡見沼通船堀（西縁）確認調査 史跡真福寺貝塚総合調査概報（一）』翻刻 同志社大学歴史資料館所蔵酒詰伸男氏「武蔵国柏崎村真福寺貝塚発掘報告」草稿』さいたま市埋蔵文化財調査報告書 第十一集

阿部芳郎二〇〇四『失われた史前学 公爵大山柏と日本考古学』岩波書店

阿部芳郎二〇一六「余山貝塚における骨角製漁労具の製作技術」

『考古学集刊』第十二号

石川博行ほか二〇一一『居木橋遺跡（A地区）・居木橋遺跡第十一号発掘調査報告書』加藤建設株式会社

岩槻市教育委員会二〇〇〇『史跡真福寺貝塚調査報告書』岩槻市文化財調査報告書第二十一集

植月学二〇一六「西ヶ原貝塚第ⅩⅢ地点から出土した動物遺体」『東京都北区西ヶ原貝塚』

遠藤邦彦二〇一七『改訂版 日本の沖積層・未来と過去を結ぶ最新の地層』富山房インターナショナル

栗島義明二〇一二「緑泥片岩製石棒に見る需要システム」『埼玉県立史跡の博物館』第六号

小林達雄一九九六『縄文人の世界』朝日新聞社

児山敬一九八五『海の貝』学研の観察図鑑十三

酒詰伸男一九八四『日本石器時代食料総説』土曜会

樋泉岳二・西野雅人一九九九「縄文後期の都川・村田川流域貝塚群」『研究紀要十九』千葉県文化財センター

堀越正行二〇一〇「東京湾東岸地域の縄文社会と黒耀石利用」『移動と流通の縄文社会史』雄山閣

能城修二〇一八「縄文時代後・晩期の古環境と真福寺貝塚」『国史跡が拓く縄文の世界』真福寺貝塚と縄文後晩期の世界』  
明治大学黒耀石研究センター

吉岡卓真二〇一八 a 「縄文時代後晩期集落形態の多様性」『埼玉考古』五十三

吉岡卓真二〇一八 b 「真福寺貝塚の発掘の成果と意義」『国史跡が拓く縄文の世界』真福寺貝塚と縄文後晩期の世界』明治大学黒耀石研究センター

吉川昌伸二〇一一「クリ花粉の散布と三内丸山遺跡周辺における縄文時代のクリ林の分布状況」『植生史研究』十八